

あ。う。る

O W L

Treasure every meeting as it's chance to happen is only once in a life time.

北海道歴史秘話 27

明治初期、北海道開発を主導し
権勢をふるった開拓使の役人達。
その暮らしぶりには維新以前と
変わらぬ庶民との格差があった。

勤務時間・給料

開拓使に勤務した役人の一日のスタートは、出勤簿に印鑑を押すことから始まった。出勤時間は午前九時。ただし、やむを得ない事情があれば、二五分以内の猶予をもらえた。退庁は午後四時。このような役人生活であった。

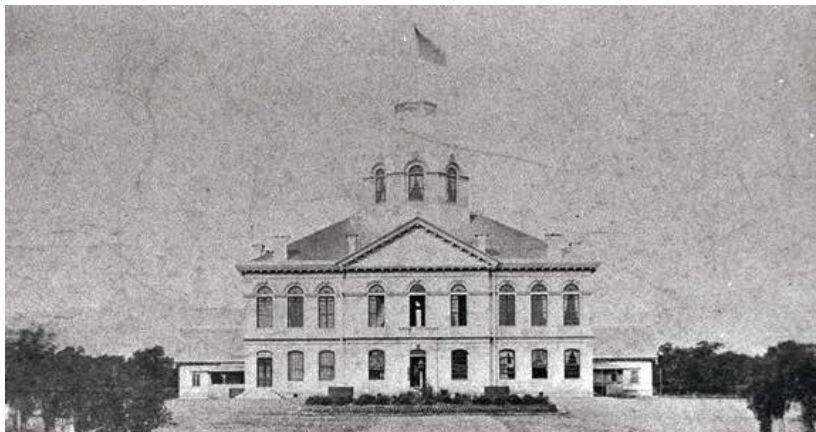
出勤時間には例外もあった。明治五(一八七二)年という年は、かなり暑かったらしく、「酷暑に付き、当分の内七時出頭、午後二時退庁」と出勤を早朝に変更し、明治九(一八七六)年まで続いている。

役人の給料は、主任クラスにあたる大典で月給五〇円(明治四年)。今の金額だと一〇〇万円ぐらいになるであろうか。開拓民にはため息の出るような金額だった。開拓長官になると大典の一〇倍の月給五〇〇円。当時の紙幣は大きかったので、高官になると一人では給料を持ちきれず、従者に担がせて帰ったなどという話もある。

明治新政府は「人材登用第一の急務、心当たりの仁あらば早々言上候事」といってはいたが、誰にでも役人の道が開けていたわけではない。黒田清隆時代の開拓使などは、ほとんど黒田と同じ薩摩出身者で固められており、役人と庶民との関係は、かつての武士と町人・農民のそれと大差がなく、役人は庶民に対してかなり横柄だった。また汚職に手を染める役人も多かったようである。

勤務評定

明治十四(一八八二)年、開拓長官の黒



明治10年頃の開拓使本庁舎(北海道大学附属図書館蔵)

田清隆が行った役人の勤務評定を見ると、部下をどう評価していたか知ることができ。甲の甲から丁まで、ランクを六つに分けているが、上位はほとんどが薩摩出身者で、身びいきの臭いが強い。土佐藩出身の岩村通俊と庄内藩出身の松本十郎、この二人の大判官に対しては、この二つというBクラス扱いだ。

河野常吉編著の『北海道史人名字彙』によれば、岩村を「創業的経綸の才に富む」、松本を「政をなすや確実を主とし、乱費せず。貯蓄して他日の用に備う」と記し、二人の性格を浮き彫りにしている。

岩村から明治六(一八七三)年に本府建設のバトンを受け継いだ松本は、緊縮政策をとった。そのため、市内は不況となり、住民の半数以上がいなくなってしまうたが、その後、開拓使で桑園を開いて養蚕室を建てたり、製網事業などを始めたりして、ようやく一息つくことができた。また、

藩閥が幅を利かせるなかで、開拓の中枢を受け継いだのは、主流とは評価されない、個性的な役人たちだった。



開拓長官 黒田清隆(『明治大正期の北海道(写真編)』より転載)



西村貞陽(北海道大学附属図書館蔵)

黒田長官が明治八(一八七五)年、住民に貸し付けた家作料一〇〇円のうち、八〇円を返済免除にしたので、夜逃げ組もぞくぞくと戻って来た。こうして官庁頼みの官僚存体質が生まれた。

人情判官

松本十郎には水戸黄門のような逸話も残っている。

松本がコモを巻いて創成川のところで寝ていると、巡査が来て打ち叩いた。翌日、松本はこの巡査を呼び出して、クビにしたというのである。松本は、私生活や金銭面にもうるさかったため、役人仲間には煙たい存在であった。そういう松本であるから庶民には人気があった。

松本は人情判官でもあった。樺太アイヌ約八五〇人が明治八(一八七五)年の樺太・千島交換条約で日本の地を選び、移住する

ことになった。彼らは樺太に近い宗谷を希望し、その地に落ち着いた。しかし開拓長官の黒田がこれを許さず、「未開蒙味であるから幌内炭鉱に入るのがよい」と江別・対雁への移住を命じた。松本は強く抵抗したが、命令は覆らず、彼が道内旅行をしている隙を見て対雁に強制移住させたため、松本は大いに怒り、辞職してしまった。

西村貞陽

ただあき

黒田清隆の勤務評定の上位、甲の中でも、一人だけ派閥とは無関係の人物の名を見つけて出すことができる。佐賀藩出身の中判官、西村貞陽だ。旧佐賀藩主・鍋島直正が初代開拓長官になった関係で開拓使入りし、島義勇判官が罷免された後、札幌本府再経営の計画を建議し、「本府の広さを一里四方にする」「周辺に衛星村落を設置する」などを定めた人物だ。

入った時は、その他大勢の一人に過ぎなかった西村だが、一年後には二階級特進し、権監事になるという異例の出世ぶり。しかも幹部職では最年少の二四歳であった。

前述の河野の『北海道史人名字彙』では、西村は「人となり鋭敏、吏務に通ず。常に長官を補翼して枢機に参与し、声望同僚をしのぐ」とある。まさに黒田ブレインである。

このように北海道の開拓は、創業的経綸の才の岩村から確実第一の松本を経て、政策マンの西村へと受け継がれていったのである。

あつろの 杜 フリーライター 関口麻奈美さん

Interview

10月に小磯修二北
大特任教授との共著『地
域とともに生きる 建設業Ⅱ』
を出版した関口麻奈美さん。
取材している人からエネ
ルギーをもらおうという関口さ
んのお話です。

独立

出身は苫前町古丹別こたんべつです。留萌高校を出て天徳短大の食物栄養学科に行きました。ウチには、母・姉・祖母・私と女が四人いたため、あまり台所に入らなくて料理をしたことがありませんでした。「それでは恥ずかしい。食物栄養学科に行ったら勉強しよう」と思い、入学しましたが、栄養士を目指す人として、お料理が好きだとか、お菓子作りが好きだとかいう人ばかりで、ちよつと選択を間違えた。それでも栄養士の資格をとって一年間、乳児保育園に勤めたのですが、書く仕事が好きで、編集プロダクションに転職しました。マガジンハウスの『オリーブ』という雑誌が好きで、編集の仕事ってカッコいいなあ、昔からあこがれていましたので。

人と出会い 現場から声を 伝えていく...



関口麻奈美
せきぐちまなみ

苫前町生まれ。編集プロダクション会社勤務を経て、1999年に独立。マーケティング調査や編集業務に携わりながら地域研究活動にも従事。釧路公立大学客員研究員として商店街活性化、観光経済調査などの研究プロジェクトに参画。99年から発行されている『開発こうほう』地域経済レポート特集号『マルシェノルド』（一般財団法人北海道開発協会発行）の編集、取材に創刊から携わる。著書は『commons 地域の再生と創造』（共著、北海道大学出版会）など。

一九九九年にフリーになりました。出身の苫前町ですが、私がいたころ、町には六千人ぐらいの人がいたと思います。しかし、今はその半分の三千人台。こんな状態で果たして地方は大丈夫なのかなと思ひ、地域開発政策や地域経済が専門の小磯修二先生にお願いし、そのお手伝いをさせていただいているうちに、地方に関心を持つようになり、地方にも独立する

きつかけの一つでした。
建設業を取材して
実家は建設業でした。父が家
事務所を置いて友達と三人で始め
たのですが、社員五人ぐらいの小
さな会社でしたので、多分下請け
のさらに下請けクラスだったと思
います。
私が子供のころ、朝御飯のとき
には、既に父は出かけて食卓には
いませんでした。晩御飯もあまり
一緒に食べた記憶がありません。
夜遅くまで、事務所で事務処理な
どをしていましたから。ですから、
私にとって建設業は、こんな大変
な仕事をする人のところには絶対
お嫁に行かないと思うくらい、イ

メージが悪かったんです。ずうつとそのイメージを引きずっていたのですが、小磯先生が建設業は地域を支えている産業だと書かれていたのを読んで、建設業ってこんなにすごかったんだということを知りました。
私にはイメージが良くなかった父の仕事ですが、小説『龍嵐』のモデルとなった「三毛別のヒグマ事件」の現場に行く砂利道は、お父さんがやったんだ」と、社会人になって初めて父から聞かされた。「今まで口にしたことはなかったけれど、父は、事件の復元現場の道づくりを担当したことが、ちよつと誇りだったのかなあ。自分がやってきた土木の仕事に、本当は誇りを持っていただけたけれど、あまり言わなかったのかなあ」とこの本（『地域とともに生きる 建設業Ⅱ—北からの挑戦』）を書いていました。
建設業の皆さんって、自分のやってきたことをあまり自慢しないことが美德という風潮があったのではと、今回取材を通して感じましたね。

建設業に携わる方々は、とても真摯に地元と向き合っていて、地域振興とかまちづくりにすごく関心がある人が多いと思います。イベントの設営などもほとんどボランティアでやっていますし、災害のときなども、最初に頼るのは建設業です。建設業の方々は、私たちの生活の安全を確保する最前線にいるんですよね。
『建設業Ⅱ』
『建設業Ⅰ』のほうは小磯先生が産業の視点で大学の先生らしい形で体系的、科学的にまとめられているのですが、今回出版した『建設業Ⅱ』は、建設業の皆さんに話を聞いて、実際にどんな活動をしているのか、企業ごとに紹介しています。
例えば除雪の現場にお邪魔したり、草刈りをしている場とか、畑を耕し直すとか、そういった現場を見学したりして、できるだけ建設業の皆さんの声をそのまま伝えるようにしました。『建設業Ⅱ』は、『建設業Ⅰ』を引き継いだ実践版と、とらえていただければいいのではないかと思います。
私の仕事のモチベーションはいろいろな人と会うことです。勉強にもなるし、取材している人からエネルギーをもらうことがすごくありますね。今回も「ああそうか、こういう方もいらっしやるんだ。自分も頑張らなければ」と、建設業の皆さんからパワーをいただいたような気がします。

「いろはにほへと」と「あいうえお」

日本の識字教育のお話です。江戸時代、寺子屋では「いろはにほへと」を仮名の手本として教えていました。しかし、今の小学校では「あいうえお」と教えます。そのため、なんとなく「いろはにほへと」は古いもので、「あいうえお」は明治時代から使い始めたものと思いがちですが、実はそうではありません。

「いろはにほへと」も「あいうえお」も成立したのは平安時代中期。しかも「あいうえお」のほうが先にできたという説が有力です。同じ時代に成立したはずなのに、二つの扱いが大きく違うのはどうしてなのでしょう？

その原因が江戸時代の寺子屋です。なぜ寺子屋が「あいうえお」ではなく「いろはにほへと」を教えたかという点、仏教の教えが込められた、ありがたい歌だったからです。

「色は匂へど散りぬるを
（花は咲いても散ってしまう）
我が世誰ぞ常ならむ
（この世の中に不変のものなどあり得ない）

有為の奥山今日越えて
（いま無常の現世を超越し）
浅き夢見し酔ひもせず
（はかない夢を見たり酔ったりはするまい）

そんな「いろはにほへと」の独走状態に待った！をかけたのが、明治時代の廃仏毀釈運動。神道と仏教の分離を目的に、明治政府が行ったこの動きにより、仏教的な色彩の強い「いろはにほへと」も排斥の対象となり、小学校では代わって「あいうえお」を教えるようになったというわけです。

それにしても江戸時代というのは、すごい時代だったんですね。子供の頃から、人生の無常を謳った歌を手本にしていたのですから……。

O W L I N F O R M A T I O N

自費出版物に光をあて、出版文化の活性化を応援する

「第19回日本自費出版文化賞」作品募集
2016年3月31日(木)受付締切(当日消印有効)
主催／一般社団法人日本グラフィックサービス工業会
主管・申込先／NPO法人日本自費出版ネットワーク 日本自費出版文化賞事務局
(〒103-0001東京都中央区日本橋小伝馬町7-16 ニッケイビル7F (社)日本グラフィックサービス工業会内 TEL03-5623-5411)

日本自費出版文化賞は、人々の目に触れにくい自費出版物に光を当て、かつ自費出版の再評価・活性化を促進しようとするもので、1998年度から毎年行われています。
応募資格は、制作費用の全額または一部を著者(個人・団体)が負担し、日本国内で2005年以降に出版され、主として日本語で書かれた一般書で、製本された著書。地域文化・詩歌など7部門に例年約600点の応募があり、入選には賞状、大賞と各賞には賞状と副賞が贈られます。
第18回は研究評論部門の「絵双六—その起源と庶民文化—」が大賞を受賞。表彰式での受賞者による熱意溢れるスピーチの様子が、ホームページ(<http://www.jsjapan.net>)から動画を閲覧することができます。また同法人では東日本大震災を機に、被災した地域の自費出版物を収集・保存・公開する特別企画「東北の記憶と記録」も募集中です。いずれも詳細は同法人ホームページまで。



受賞作は10月開催の「日本自費出版フェスティバル」会場で表彰され、受賞者の記念スピーチが行われます。

山とともに歩んだ半世紀

日本山岳会北海道支部 「日本山岳会北海道支部50年のあゆみ」を発売

公益社団法人日本山岳会は1905年に設立された日本最古の山岳クラブで、その設立当初から河合篤叙、宮部金吾など多くの岳人が北海道からも所属。現在は全国に約5,000人の会員を擁し、自主性に基ついたボランティアとして山に関する活動を行っています。
北海道支部は1949年に10番目の支部として発足。数年の活動後、十数年の空白を挟んで1969年に再び設立され、2015年に50周年の節目を迎えました。支部では前年に50周年プレ海外登山、7月にカムチャツカ・アバチャ山への記念海外登山を実施。12月12日には記念式典を挙行了しました。同時に発行された記念誌は200頁を超え、支部の歩みを中心に、北海道中央分水嶺踏査などの山行や、小中学生を対象とした自然児学校、文化センターでの登山教室の開催、高山植物盗掘防止のバトロールなど、近年増加する登山者への安全啓発や高山の自然保護と、幅広く活躍する支部会員の活動がまとめられています。
充実した年表などで過去半世紀の歩みを網羅し、将来への礎となる資料的な価値ある記念誌です。



B5判 グラビア8頁、本文226頁
希望者には有償で少数数頒布
(問合せ:長谷川01090-6266-3365)

木工家・高橋三太郎に迫る

木工家の生まれ方 カタチの生まれ方
高橋三太郎・編著
定価1,250円+税
札幌を拠点とする「工房家具」の担い手・高橋三太郎。工房での製作はもとより、公共建築のための椅子やベンチでも評価を受けるこの木工家は、建築家などと積極的に協働し、空間を高める家具を世に送り出しています。
工房家具というスタイルを振り返る関係者の寄稿と、著者自身が語るこれまでの軌跡と製作への思い、建築空間から生まれた作品への言葉を収録。「高橋三太郎のカタチ」に迫る一冊です。



中西出版 B5変形判、64頁
2015年10月刊行

マールの冒険、今回の舞台は?

おばけのマールとみんなのとしょかん
なかい れいえ
けーたろう・ぶん
定価1,200円+税
誕生10周年を迎えた「おばけのマール」。最新第7作では、マールが夜の「としょかん」へお出かけします。
夜ふかしをしてりのおじいさんのおはなしを聞いたマールは、続きが聞きたくてたまらず、「ものがたり」がつまっているという「ほん」のある「としょかん」へ。そこへおにのきょうだいやおかさんのおおかみさんがやって来て、みんなで「おしまいの後のおはなし」を探しますが…。冬の夜を優しく温める絵本です。



中西出版 A4変形判、32頁
2015年12月刊行

北海道から建設業の挑戦を紹介

地域とともに生きる 建設業II
北からの挑戦
小磯修二、関口麻奈美・著
定価1,500円+税
災害対応や除排雪、行事への協力と、住民の暮らしを支える地域の建設業。産業の視点から論じた前著から1年、「北からの挑戦」と題し続編が出版されました。
地域密着で歩んできた企業ならではの発想を生かし、北海道各地で展開中の事業を丹念に取材。「地域産業としての建設業」の現場から生まれた取り組みを、豊富な具体例で紹介しています。各章末には小磯教授によるコラム「地方の眼」を掲載。



中西出版 四六判、235頁
2015年9月刊行



年末に二つのイベントを実施した。歴史パネル展と「マール」シリーズの新作発表である。対象と性格は異なるがどちらも好評のうちに終わることができ喜んでいる。特に「北で燃えたサムライ 村橋久成展」と題したパネル展は共催でもあり、難しさもあった。開拓使官吏として数々の勤業事業を手がけ、中でも北海道の地にビール産業の土台を築いたという功績の割に、知名度が高いとは言えない人物を取り上げたからである。▼本号の〈歴史秘話〉のテーマも期せずして開拓使であった。明治維新150周年が近づき、関連の企画が増えている。その流れとは異なるが〈あうるの杜〉で紹介した「地域と共に生きる 建設業II」もまた「建設業」を通して北海道の現実を描いたものと言える。(Y)

発行・編集／中西出版(株)
〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1-134
電話011-785-0737 FAX011-781-7516
E-mail: owl@nakanishi-shuppan.co.jp
発行責任者／林下英二
発行日／2015年12月25日 <http://nakanishi-shuppan.co.jp>

